

## 龍興寺窖蔵出土南北朝時代造像の年代について

小澤 正人

山東省青州市龍興寺窖蔵遺跡からは南北朝時代から宋代にかけての造像400体余りが出土している。このうち主体をなしているのは南北朝時代の北魏後期から北斉のものであるが、そのほとんどは破損した状態で出土しており、全身像がわかるものは数少ない。

そのなかで龍興寺図158号菩薩像<sup>1)</sup>は、右手や頭部の一部などを欠くものの、ほぼ完全な姿で出土した数少ない造像である。しかも伏し目がちの表情と量感に満ちた身体表現をしており、龍興寺窖蔵出土造像のなかでも、注目を浴びてきた。

この菩薩像の年代については一般に北斉とされるが、同じ青州地区にある雲門山石窟造像との比較から、隋代とする考えもある。本稿は、この龍興寺図158号造像を取り上げて、その年代について検討することを目的とし、あわせて仏像彫刻史上の位置づけについて若干の考察をおこなうものである。

### 1 龍興寺図158号菩薩像の概要

龍興寺図158号造像は、右手首や頭部や天衣の一部を欠損するものの、その他はほぼ完存しており、頭部や腕部などを欠くことが多い龍興寺窖蔵出土造像の中では全容がわかる貴重な資料となっている<sup>2)</sup>。以下まずこの菩薩像について、その概要をみてみたい(第1図)。

図158号菩薩像は高さ136センチメートルを測り、龍興寺窖蔵出土造像で一般的な石灰岩で作られ、無彫刻の蓮台に立っている。顎を引き気味とし、胸と腹をやや前に出し、ほぼ直立する姿をしている。天衣・裙は身体に密着してお



1



2



3



4



5



6

第1図 龍興寺図158号菩薩像

り、身体のラインがはっきりとわかる。肩から胸にかけては張りがあり、逆に腰は引き締まり、腰から大腿部にかけて再び張りがみられる。側面から見ても全体に量感が感じられ、写実的な肉体表現への志向が顕著である。

頭部は楕円形で張りがあり、頬骨などは目立たない。頭上には宝冠をつける。宝冠を止める冠帯には宝飾が付けられ、その下からは編み込まれた頭髪が見える。目は上脣を下げ、下脣は波状として、目を伏せている。鼻梁は高く、口は小さく、上唇はやや厚めである。頭の後ろから垂髪が垂れ、肩から上腕に懸かる(第1図4・5)。

肩には肩飾が付く。龍興寺窖藏出土造像の肩飾は一般に円形飾から布飾を垂下させるが、本作例では円形飾が欠損しているようで、布飾のみがやや長く腕部に懸かる。胸には、宝珠、口から房を垂らした獣面、宝飾からなる垂飾を付けた、連珠状の胸飾を付けている(第1図6)。

天衣と瓔珞は一体化している。天衣は背中から上腕を大きく覆った後、身体前面に密着して垂下し、膝付近で交差する。その後、身体左側ではやや上方に上った後、瓔珞とともに左手につままれる。右側では体側にそって上り、右腕前腕に懸かった後再度垂下している。瓔珞は細い綾杉状の綱に花綱と円珠の飾を通して、背面では環をくぐらせている。

この菩薩像の着衣は特徴的である。まず両肩からさがる內衣が、胸元で結び目のない帯にはさみ込まれている(第1図6)。この帯は、背面で裾のなかへと垂下している(第1図2)。裾の上端は折り返される。この裾は腰紐で結ばれているようで、結紐部は折り返しに隠れて見えないが、両端から垂下する紐が足部にまで達している(第1図3)。裾の裾部は形式的な折り返しがみられる。

検討が必要なのは胸元の帯と、裾の折り返しの間の着衣である(第1図1・6)。この部分では両肩からさがる着衣のラインが見え、一般的な左肩を覆う內衣とすることはできない。また左右の肩を覆う裾の內衣とするには胸元が大きく開きすぎており不自然である。青州地区における同様の着衣の例は多くはないが、龍興寺図183号造像(第6図1)、駝山石窟第3窟左脇侍菩薩(第10図5・6)、雲門山石窟第2龕左脇侍菩薩(第11図5・6)などの作例があり、龍興寺図158号菩薩像が孤立した例ではないことを示している。ただしいずれも着衣の一部が天衣に隠れており、全体の形状ははっきりしない。

この着衣については、龍興寺窖藏出土とされ、青州市博物館に展示されている、図版未掲載の菩薩造像が重要な示唆を与えてくれる(第2図1・2)。この



1



2



3



4

第2図 龍興寺窖蔵および諸城県出土菩薩像（1・2：龍興寺窖蔵出土菩薩像 3・4 諸城県出土菩薩像）

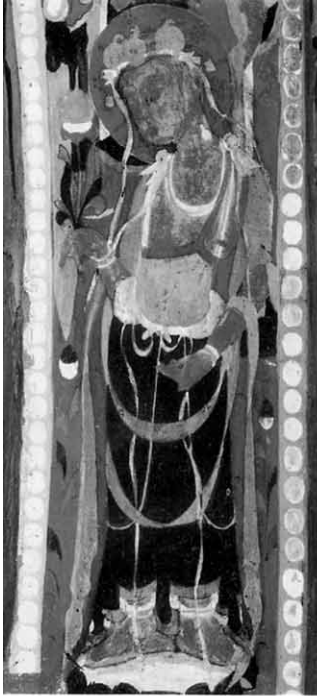
像にもやはり両肩から下がる內衣のラインが確認できるが、天衣に隠されていないため、この部分が幅広の紐状になっていることが看取される。第2図2の拡大図を例にすると、左胸部分で、瓔珞向かって左にこの紐がはっきりと確認できる。従って、この內衣は両肩から紐でつるした內衣ということになる<sup>3)</sup>。同様の內衣は諸城出土の菩薩像でも確認されている(第2図3・4)。類似する事例としては、敦煌莫高窟の隋或いは隋から初唐とされる壁画(第3図・第4図)、塑像(第5図)に左肩から紐で吊った內衣の表現があり、龍興寺図158号造像はこれを両肩から吊ったものと考えられる。

ここまで着衣法についてやや詳しく述べたが、この他に龍興寺図158菩薩像では腰で結ばれた裾から垂下する数本の飾帯が目を引く<sup>4)</sup>。まず前面では連珠文で方形に区画した文様帯をもつ幅広の飾帯が垂下する(第1図3)。この飾帯は連珠文の方形区画の中に、化生童子、獸面、宝飾、蓮華、宝瓶などを彫り、先端は3つの房とする。さらに背面にはやはり幅広の飾帯を垂下させ、中間を結んでいる(第1図2)。この飾帯には「九月廿五日」の字が書かれている。また身体の側面には連珠や宝飾を連ね、先端を房にした飾帯を垂下させている。

以上が龍興寺図158号菩薩像の概要である。龍興寺窖藏遺跡の発掘・整理をおこなった青州市博物館では、1998年の簡報において、この菩薩像の年代を北齊とした。この観点はその後青州市博物館が編集に関係した各種図録でも一貫している。

これに対して村松哲文氏は1999年に発表された論文で龍興寺図158号菩薩像にも言及され、龍興寺図158号菩薩像の「腰帯」が隋代とされる雲門山第2龕菩薩像の「腰帯」と類似することを根拠として、この菩薩像の年代を隋代とした<sup>5)</sup>。青州市博物館も2006年に出版した『青州博物館蔵珍 龍興寺仏教造像巻』では、この菩薩像の年代を「北齊 - 隋」として、時間幅をとるようになっている。

このように龍興寺図158号菩薩像の年代としては北齊、隋とする説が提起されている。龍興寺窖藏出土の造像のうち、北齊・隋の紀年銘を持つ像はなく、いきおい様式的な検討を通して年代を決定せざるをえない。従って村松氏が年代が確定している雲門山石窟の資料を用いて、図158号菩薩像を隋としたことは説得力を持っている。ただし、村松氏が比較したのは腰帯のみであることから、さらに検証が必要である。そこで以下の文中では、まず龍興寺窖藏出土菩薩単独像における龍興寺図158号菩薩像の位置づけを検討し、その上で隋代と



1



2



3



4

第3図 敦煌莫高窟菩薩像(1)(1~2: 莫高窟第295窟 3~5: 莫高窟第276窟)

龍興寺窖藏出土南北朝時代造像の年代について



第4図 敦煌莫高窟菩薩像(2)(1-3: 莫高窟第276窟 4-6: 莫高窟第278窟)



1



2



3



4



5



6

第5図 敦煌莫高窟菩薩像(3)(1~3: 莫高窟第244窟南壁 4~5: 莫高窟第244窟北壁)



される駝山石窟・雲門山石窟の菩薩像との比較をおこなうことで、図 158 号菩薩像の年代について考察をおこなうこととする。

## 2 龍興寺窖藏出土菩薩単独像との比較

まず出土した菩薩単独像のうち、像容が類似する作例を見たい。

類似する作例としては、まず龍興寺図 183 図造像を挙げるができる（第 6 図 1）。この菩薩像は白玉で作られており、頭部と右腕前腕を欠損している。高さは 64 センチメートルで、欠損した頭部を加えたとしても、図 158 号菩薩像よりも小型である。胸と腹部をやや突き出しており、特に腹部は量感に満ちている。肩部に円形飾と布飾の肩飾を付ける。胸には獣面の垂飾を付けた連珠文胸飾をつけている。着衣形式は龍興寺図 158 号造像と同じで、上半身には両肩から下がる內衣をつけ、幅広の帯で縛っている。裙は上部を折り返しており、折り返しに隠れた結紐から腰紐が足下にまで垂下している。正面には幅広の飾帯が、また側面にも飾帯が見える。前面の飾帯は幅広で、先端は房状になっている。彫刻などはみられない。裙の裾は形式的に折り返されている。天衣は肩から上腕を覆った後、身体側面に沿って垂下し、前面で平行して U 字状になり、右側面で交差している。瓔珞は左肩からのみ垂下し、太めの綾杉状の綱に、花綱と連珠を組とした飾を通して。天衣と瓔珞は左手でつままれている。

図 183 号菩薩像は頭部が欠損しているため、図 158 号菩薩像と厳密に比較することはできないが、量感に満ちた写実的な像容、両肩から下がる內衣、獣面の胸飾、幅広の飾帯、天衣と瓔珞を左手でつまむ仕草、綾杉状の綱に花綱・円珠の瓔珞、などの共通点が多い。その反面、図 158 号菩薩像が青州で一般的な石灰岩製であるのに対して、図 183 号菩薩像はこの地では産出しない白玉製である点や、前者が北魏以来青州の菩薩像に一般的な X 字状天衣であるのに対して、後者が平行 U 字状天衣であるといった違いもある。しかし全体としてみれば両者の間に密接な関連がるのは明らかである。

また図 183 号菩薩像ほどではないが、図 158 号菩薩像と類似した作例として、図 178 号菩薩像を挙げるができる（第 6 図 3）。この菩薩像には両肩からの內衣はないが、写実的な肉体表現、裙上端の折り返し、方形区画に彫刻のある幅広の飾帯や、綾杉状の綱と花綱・円珠の瓔珞などが共通し、また胸飾も円珠状で、図 158 号菩薩像にも見られた房飾を付けており、共通点が多い。



第6図 関連する龍興寺窖蔵出土菩薩造像

(1: 龍興寺図 183 号菩薩像 2: 龍興寺図 176 号菩薩像 3: 龍興寺図 178 号菩薩像)

同様に龍興寺図 176 号菩薩像も類似する造像としてあげることができる(第6図2)。この像も両肩からの內衣はないが、写実的な肉体表現、裙上端の折り返しと連珠文による方形区画に彫刻を施した幅広の飾帯、さらに獣面の垂飾を付けた連珠状の胸飾などが、図 178 号造像と共通している。さらに図 158 号菩薩像と密接な関連がある図 186 号菩薩像とは、平行 U 字状の天衣と、右肩からの片側だけの瓔珞を付けている点を共通としている。

このように図 158 号菩薩像は、龍興寺窖蔵出土造像のなかに密接に関連する作例あることから、孤立例でないことは明らかである。そこで、次にそれ以外の北齊とされる作例との関係を検討してみたい。第7~9図は北齊と考えられる作例を集成したものである<sup>6)</sup>。

個別に検討することは煩雑になるため、ここでは図 158 号菩薩像との全般的な比較のみを記述することにする。

全体的な像容の表現としては、写実的な肉体への志向性が認められる。ただし龍興寺図 172 号菩薩像(第7図1)のように図 158 号菩薩像同様にほぼ直立

龍興寺窖藏出土南北朝時代造像の年代について



1



2



3



4



5



6

第7図 龍興寺窖藏出土の北齊時代とされる菩薩像(2)  
(1: 龍興寺図 172号 2: 龍興寺図 171号 3: 青州頁 163号  
4: 龍興寺図 180号 5: 龍興寺図 175号 6: 龍興寺図 182号)



第8図 龍興寺窖藏出土の北齊時代とされる菩薩像

(1: 龍興寺図166号 2: 龍興寺図185号 3: 龍興寺図167号 4: 龍興寺図181号 5: 龍興寺図179号)

龍興寺窖藏出土南北朝時代造像の年代について



第9図 龍興寺窖藏出土の北齊時代とされる菩薩像(3)  
(1: 龍興寺図 184号 2: 龍興寺図 201号 3: 青州頁 168号  
4: 龍興寺図 167号 5: 龍興寺図 173号 6: 龍興寺図 186号)

して胸部・腹部を前に出し、量感に富んだ作例がある反面、第8図に示した諸像のようにやや後ろに反り、図158号造像ほどの量感を持たない作例もあり、多様な表現がみられる。ただし写実的な肉体表現への志向性といった点では、図158号菩薩像と軌を一にしている。また頭部は作例が少ないが、一般的に頬骨が突出せず、伏し目がちな表情をしており、この点も図158号菩薩像と共通する。

このように像容の表現といった面では、北斉とされる菩薩諸像と図158号菩薩像との間には大きな違いはない。それに対して着衣・装飾品には違いが見られる。まず內衣は北斉菩薩像では左肩を隠すタイプが多く、図158号菩薩像などで確認された両肩から紐で吊す例は一般的ではない。また前面の飾帯は二本の帯を中央で縛るものが多く、幅広の帯を連珠文で区画する図158号菩薩像の飾帯のタイプはやはり一般的とは言い難い。また瓔珞は花綱、円珠、珊瑚、楔状飾を連ね、中の綱は見えない形状が多く、図158号菩薩像のように中の綱が見えるような作例はみられない。さらに胸飾は、唐草系の垂飾が一般的であり、図158号菩薩像のような獣面系の垂飾はみられない。

以上をまとめるならば、図158号菩薩像の像容は写実的な肉体表現への志向といった点で一般的な北斉菩薩像と共通してしており、このため158号菩薩像には北斉との年代が与えられてきたと考えられる。しかし着衣や装飾などの表現には明らかに一般的な北斉造像とは異なる点があることも認められるのであり、村松氏が図158菩薩像を隋としたのは、この中の飾帯に注目したことに拠っている。

以上の検討をふまえて、次に青州地区において隋代を代表する造像である、駝山石窟・雲門山石窟の菩薩像をみてみたい。

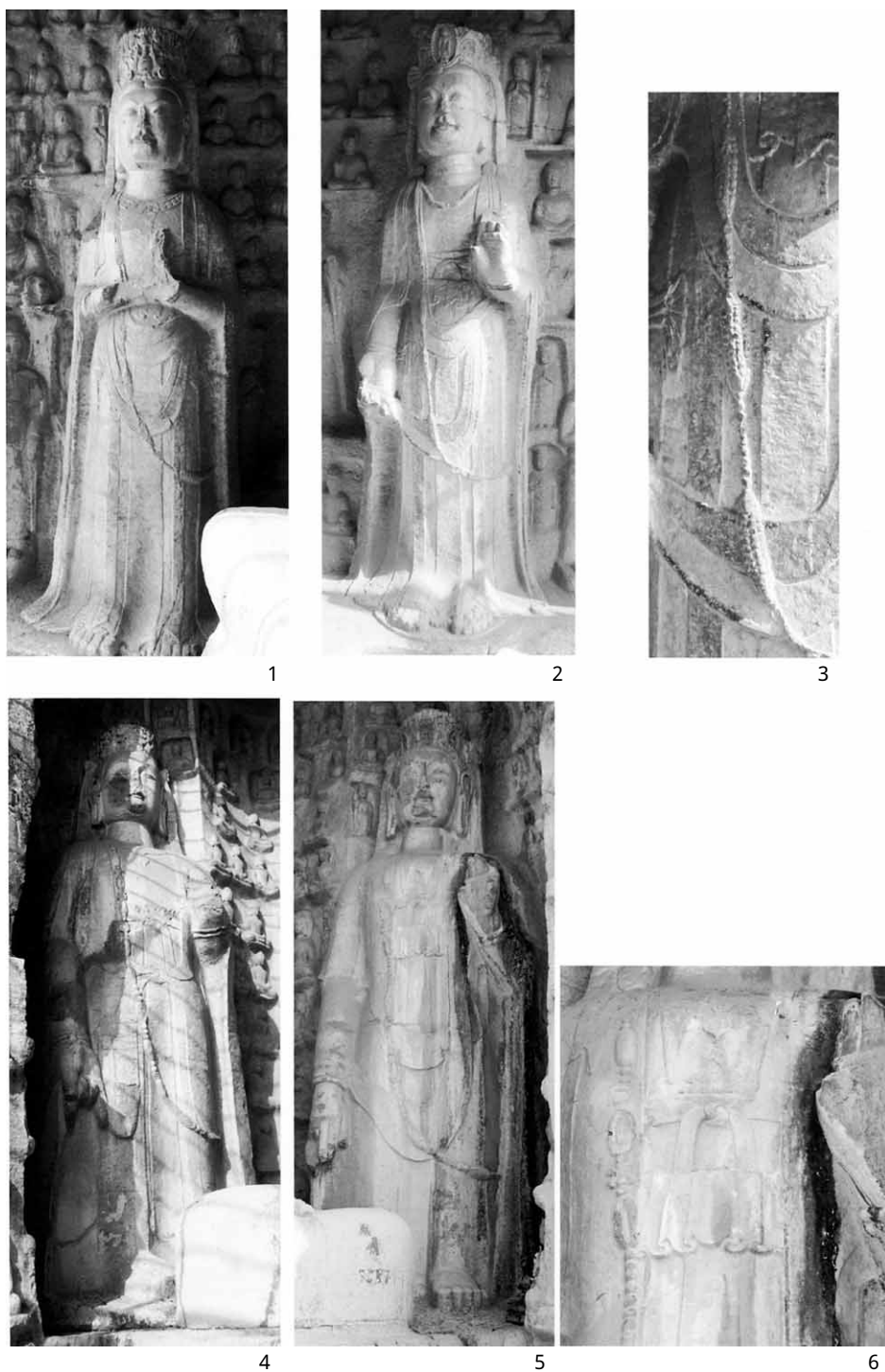
### 3 雲門山石窟，駝山石窟の隋代菩薩像

まず駝山石窟をみてみたい。

駝山石窟では第2・3窟が隋代と考えられている。李裕群氏の説に従えば、第2窟は開皇年代初（581～583年頃）、第3窟についてはそれよりやや遅く、開皇中期（590年）以前の開窟ということになる<sup>7)</sup>。

第2窟では左右の菩薩がほぼ完存している。宝冠に、左菩薩は化仏を、右菩薩は水瓶をつけており、それぞれ観音菩薩、勢至菩薩と考えられる（第10図

龍興寺窖藏出土南北朝時代造像の年代について



第10図 駝山石窟第2窟・第3窟菩薩像

(1: 第2窟右脇侍菩薩 2・3: 第2窟左脇侍菩薩 4: 第3窟右脇侍菩薩 5・6 第3窟左脇侍菩薩)

1~3)。いずれも肩から胸にかけて張りがあり、腰が引き締まり、腰から大腿部にかけて張りが見られる。但し、図 158 号菩薩像ほどの量感は感じられない。

左脇侍菩薩（第 10 図 2・3）は楕円形の顔にややつり上がる目をしている。宝冠を装飾付の冠帯でとめ、冠繪を垂らす。肩には円形飾と布飾の肩飾と付け、胸には花綱と円珠をつけた胸飾りを付ける。天衣は身体前面やや左側で交差し、ほぼ平行 U 字状になる。左側は前腕でうけるが、右側は手で持つ。瓔珞は右肩から左膝あたりまで斜めに下がる。細い綱に花綱・連珠を付ける。內衣は上端を紐で縛っており、あるいは肩からさがる紐は天衣に隠れているかもしれない。裙は上部を折り返し、腰紐で縛っており、結紐は見えないが、両側に紐が足先まで下がっている。正面には幅広で先端を房にした飾帯が下がる。さらに左右にも同様の飾帯が下がっている。

右脇侍菩薩（第 10 図 1）は胸部が破壊されているものの、全体の像容は左脇侍菩薩とほぼ同じと考えられる。但し合掌する点は異なっている。高い宝冠を付け、胸飾は連珠式である。裙は上部を折り返し、左右には裙を縛る結紐が足元にまでさがっている。また身体の前面には幅広の飾帯がさがる。天衣・瓔珞は左脇侍菩薩と同じ。

第 3 窟も左右の脇侍菩薩が残る（第 10 図 4~6）。全体としては胸と腹をやや前に出し、肉体としての質感が感じられる。ただしやや下半身が重く、バランスは悪い。左脇侍菩薩は宝冠に化仏を付けており観音菩薩と考えられる（第 10 図 5）。上半身には左右の肩からさがる內衣を纏う（第 10 図 6）。裙は上部を折り返し、正面には幅広の飾帯を垂らす。平行 U 字状天衣を付け、右肩から左肩にかけて瓔珞がかかる。瓔珞は円珠、花綱、珊瑚、宝飾などをつける。右手は持物を握っている。

右脇侍菩薩はほぼ同じ像容である（第 10 図 4）。ただし宝冠には化仏はない。內衣は纏わず、裙のみをつける。裙の上端は腰紐より上に出る。腰紐は左右に紐の先を垂らす。中央には幅広の飾帯を垂らす。天衣は X 字状で、腰の環をくぐることで交差する。右手で天衣を握っている。瓔珞はやはり右肩から左膝に斜めに懸かっている。

次に雲門山石窟を見てみたい。

雲門山石窟は青州市の市街地から南へ 4 キロの山頂にある。このうち第 1 窟には、壁面に多数の小龕が穿たれている。このなかに開皇 10 年（590 年）の紀年銘があることから、第 1 窟の開鑿年代はそれ以前と考えられている。また



第1龕に隣接する第2龕についても、その様式の検討からほぼ同時期とされている<sup>8)</sup>。

まず第1龕であるが、主尊は現在は頭部を欠損した如来座像であり、その左右に脇侍の菩薩立像がある。左脇侍像は破損が激しい。右脇侍菩薩は現在では頭部を欠損するが、頭部を残した写真もあり、ほぼその全容がわかる(第11図1)。

右脇侍菩薩は胸と腹をやや前に出し、ほぼ直立している。特に胸は厚みがあり、かなりの量感が感じられる。さらに天衣や裙は身体に密着しており、身体のラインが感じられる。

頭部には宝冠を着け、装飾を施した冠帯でこれを留めている。顔は楕円形をしており、頬骨などは目立たない。肩には円形飾と布飾を組み合わせた肩飾を、胸には連珠状の胸飾りを付ける。天衣と瓔珞は複雑な様相を示している。天衣は両肩から下がった後、左腰で交差して、身体前面では平行U字状となる。瓔珞も完全に一致してはいないが、ほぼ同じ配置となる。瓔珞は円珠を連ねた形状をしている。

上半身には左肩から右脇腹を斜めに覆う內衣を纏い、腹部を紐で縛っている。裙は上端を折り返している。結紐はこの折り返しで隠されており、結紐からの紐が左右の膝ぐらいいまで垂下している。裙は縦方向の襷が彫られている。そして中央には先端が地面にまで届く幅広の飾帯を付けている。

次に第2龕であるが、この龕では中央の主尊を欠いているが、脇侍菩薩については残りがよい(第11図2~7)。

左脇侍菩薩は宝冠と顔の上部を欠く(第11図5~7)。像容は第1龕に似ており、胸と腹をやや前に出しほぼ直立する。また全体に量感や肉体が感じられる点も同じである。頭部は高い宝冠をかぶっているが、欠損しており、形状はわからない。顔も上半を欠損しているが、ほぼ楕円形と考えられる。肩には円形飾と布飾からなる肩飾を付ける。胸は欠損があり、胸飾りは明らかではない。天衣は右側面で交差し、前面では平行U字状となっている。瓔珞は左肩から右大腿部に斜めに懸かっている。円珠、宝飾、珊瑚などを連ねている。

上半身は両肩から吊るす考えられる內衣を纏っている(第11図6)。裙は上部を折り返し、その中で腰紐を結んでいるようで、結紐左右の紐が膝まで垂れている。その上を幅広の飾帯で結んでいる。飾帯はバックルで留められており、左回りで身体を回した後、身体前面では右側から垂下している<sup>8)</sup>。裙は縦方向



第11図 雲門山石窟第1龕・第2龕菩薩像  
(1: 第1龕右脇侍菩薩 2~4: 第2龕右脇侍菩薩 5~7: 第2龕左脇侍菩薩)

の襷が彫られている。幅広の飾帯は内部を方形に連珠文で区画し、宝瓶、宝珠、童子などを彫っている（第11図7）。

右脇侍菩薩は頭部を一部欠損するもののほぼ完存している（第11図2~4）。全体の像容は左脇侍菩薩と同じで肉体を感じさせる。頭部は楕円形で、頬骨などが突出しない。目は下瞼が湾曲する。肩部には円形飾と布飾の肩飾があり、胸には房と付けた獣面や宝飾などを垂らした、連珠文式の胸飾をつけている（第11図3・4）。上半身は內衣などはつけず、天衣は身体前面で平行U字状になっている。瓔珞もほぼ身体に沿って垂下した後、平行U字状になってから腕に懸かる。裙は上部を折り返している。この中に結紐があるようで、左右の紐が膝下にまで垂下している。中央には幅広の飾帯がみえる。やはり連珠文で方形に区画し、内部には宝飾を彫る。また側面に中間を縛る飾帯を垂らしている。

以上が駝山石窟・雲門山石窟の隋代菩薩像の概要である。次に龍興寺図158号菩薩像の年代をこれら菩薩像と比較することで、検討してみたい。

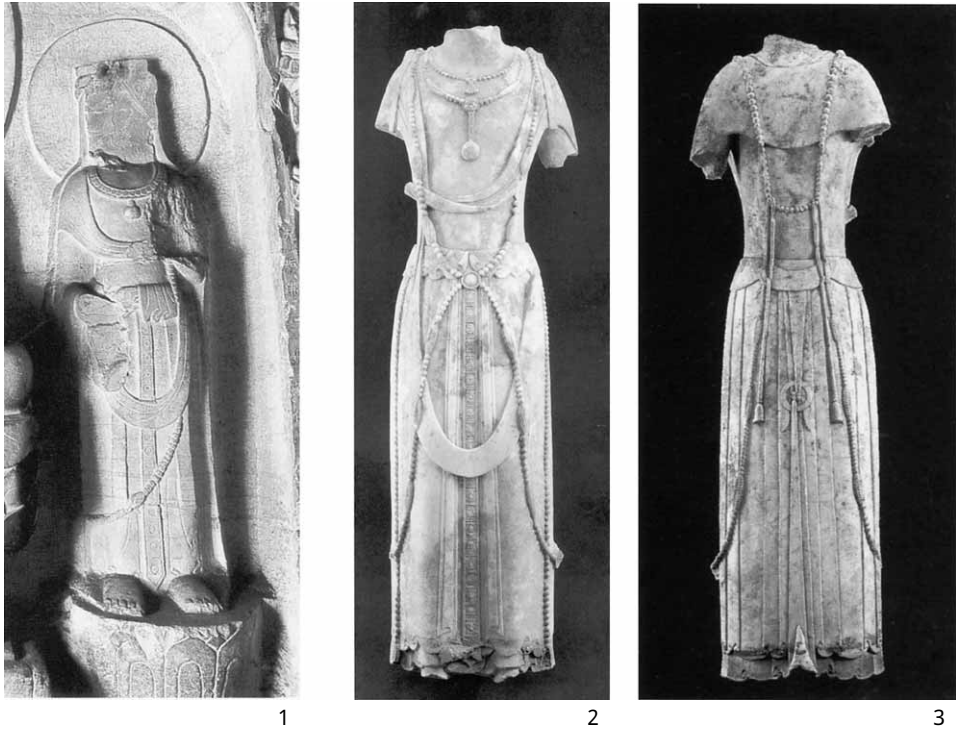
#### 4 龍興寺図158号菩薩像の年代

龍興寺図158号菩薩像と雲門山石窟・駝山石窟菩薩像を比較すると、まず両者とも胸や腹に量感が感じられ、身体に密着する薄い裙や天衣などとも相まって、肉体を表現しようとする志向が顕著であるという共通点が認められる。このことから、両者の年代が近いことが感推測される。

さらに細部の表現を見てゆくと、図158号菩薩像の特徴である両肩から紐で吊す內衣という着衣形式が、雲門山石窟第2龕左菩薩、駝山石窟第3窟左脇侍菩薩でも確認できた。獣面の垂飾を持つ胸飾も雲門山石窟第2龕右脇侍菩薩に見られる。幅広の飾帯については、雲門山石窟、駝山石窟の各脇侍菩薩に一般的に見られる表現であり、特に連珠文で方形に区画する表現は雲門山石窟第2龕の菩薩像で確認できた。天衣をつまむ仕草も駝山石窟第2窟左脇侍菩薩、第3窟右脇侍菩薩などで確認できる。瓔珞で細い網と花網・連珠で表現することも、駝山石窟第2窟脇侍菩薩に見られる。

また図158号菩薩と密接な関連が想定される龍興寺図183号菩薩像や図176号菩薩像にみられる平行U字状天衣や片側の瓔珞なども、駝山石窟第2窟、第3窟の脇侍菩薩や雲門山石窟第2龕左脇侍菩薩で確認できる。

このように龍興寺図158号菩薩や関連する龍興寺図183号菩薩、図176号菩



第12図 飾帯に方形区画の文様帯をもつ造像  
(1: 宝山大住聖窟西壁左脇侍菩薩 2・3: 修徳寺塔出土白玉象)

薩は、雲門山石窟や駝山石窟の隋代菩薩造像と、身体表現から細部の表現に至るまで類似していることは明らかである。従って龍興寺図 183 号菩薩像の年代の下限を、隋代の開皇年間まで下げることが可能だと考える。また北齊とされる菩薩との違いを重視すれば、その上限については北齊時代までさかのぼらないとすることができる。

### おわりに～龍興寺図 168 号菩薩像の位置づけ

最後に龍興寺図 183 号菩薩像の、彫刻史上の位置づけについて触れておきたい。

龍興寺窖蔵出土の造像を見る限り、青州地区では遅くとも北魏時代後期から石材による造像が盛んになり、東魏、北齊へと引き継がれてゆく。そのなかで北魏後期から東魏への変化は漸移的であるが、東魏から北齊への変化には大きなものがあった。ただしそれは東魏までの造像をまったく否定したものではな

く、造像の中には東魏までの伝統を変容させて受け継いでいるものも含まれている<sup>10)</sup>。今回の検討では従来北斉とされていた菩薩像から隋代と考えられる像を抽出したわけだが、その違いは着衣形式などの細部に現われており、それ以外の特に像容の面では北斉と隋の造像を明確に分けることは難しい。このことは北斉から隋に到る造像の変化も、青州地区においては漸移的に進んだことを示している。この間には北周による廃仏が起こっているが、造像を見る限りにおいて、この廃仏は青州地区においては大きな断絶はもたらしていない。

また青州地区では隋代まで石窟の造営はなく、もっとも古いものが本稿でも取り上げた隋代の雲門山石窟・駝山石窟である。その造像と図 168 号造像に代表される龍興寺窖藏出土の造像の関連が深いことは、これまで見てきた通りである。このことは青州地区の仏教造像、少なくとも石を素材とした造像活動が、石窟と寺院で別個に営まれたのではなく、深い関係のもとで行われていたことを表している。

つまり青州地区には、北斉から隋にかけて、寺院の石彫から石窟の造像までの制作に当たった、強い伝統を保った制作拠点があったと考えられるのである。

龍興寺 158 号菩薩像の両肩から紐で吊る內衣は、類似した片肩から吊る內衣が敦煌莫高窟などで確認できるものの、全ったく同じものは他地域では確認できない。その反面、青州地区では石窟と単独像でこの様な內衣を取り入れた複数の作例が存在することは、青州地区における造像活動が生み出した、地域的な特徴を表す要素だと考えられる。

ただし龍興寺 183 号菩薩像のいまひとつの特徴である飾帯に方形区画の文様帯を彫る例は、青州地区やそれに隣接する地域以外でも確認されている。第 12 図 1 は河南省安陽市宝山寺大住聖像窟西壁左脇侍菩薩だが、この菩薩像の飾帯には方形区画の文様帯が確認でき、宝石などの文様が彫られている。また第 12 図 2・3 は河北省曲陽市修徳寺塔出土白玉像で、これも飾帯には方形区画の文様帯が確認でき、宝石などの文様が彫られている。前者は開皇 9 年に開窟された石窟であり、後者は北斉から隋に比定されている。

このように河北省南部から河南省北部で、ほぼ同時期に飾帯に方形区画の文様帯を刻んだ例が確認できる。このことは青州地区における方形区画文様帯の出現が孤立したのではなく、河北・河南から山東にわたる華北平原全体での新しい変化の一環と考えられることを示している。

つまり龍興寺図 158 号菩薩像には、強い地域性を表す要素と広い地域でおこ

った変化に対応した要素が混在しているのである。550年代以降の華北の仏教彫刻は地域ごとに異なった複雑な様相を示すことになるが、その背景にはこのような地域性と新しい変化による共通性が同時に取り入れられることがあったと考えられる<sup>11)</sup>。龍興寺183号造像はまさにこのような複雑な造像活動を反映した作例とすることができる。

- 1) 龍興寺窖蔵については簡報が公表されているが(注2a),正式報告がなく,出土造像の遺物番号などは部分的な公表に止まっている。本稿では遺物番号がわかるものについてはこれに従うが,不明なものについては,青州博物館が編集した注2c図録の図番号を以て代えることにする。
- 2) 龍興寺図158号造像は当初から注目されており,図録などで取り上げられることも多い。これまで公表されている代表的なものとしては以下の通りである。
  - (a) 山東省青州市博物館「青州龍興寺佛教造像窖蔵清理簡報」(『文物』1998年第2期)
  - (b) 中国歴史博物館・北京華觀芸術品有限公司・山東青州市博物館『山東青州龍興寺出土佛教石刻造像精品』(1999年 北京)
  - (c) 青州市博物館『青州龍興寺佛教造像芸術』(1999年 山東美術出版社 濟南)
  - (d) 香港芸術館『山東青州龍興寺出土佛教造像展』(2001年 香港)
  - (e) 中国世紀壇芸術館・青州市博物館『青州北朝佛教造像』(2002年 北京出版社 北京)
  - (f) 青州市博物館『青州博物館蔵珍 龍興寺仏教造像卷』(2006年 海天出版社 深圳)
  - (g) MIHO MUSEUM『中国山東省の仏像』(2007年 MIHO MUSEUM 友の会)このうち図録(g)のなかの片山寛明氏による解説がもっとも詳細である。
- 3) 観察にあたっては筑波大学八木春生氏から教示をいただいた。なお写真は青州市博物館からの提供を受けた。八木春生氏,青州市博物館に記して感謝する。
- 4) 本稿でこのように裾から垂下する帯を「飾帯」としたのは,先に挙げた注2文献hの片山氏の記述によっている。なお片山氏は「飾り帯」と表記しているが,本稿では上記のように「飾帯」と表記することとする。
- 5) 村松哲文「雲門山石窟における菩薩像の腰帯表現」(『吉村怜博士古稀記念 東洋美術史論叢』雄山閣出版 1999年)
- 6) 龍興寺窖蔵出土の菩薩単独像の変遷については別稿を用意している。背屏式における変遷については以下の文で概観をおこなっている。

小澤正人「龍興寺窖蔵出土背屏式造像について」(『社会イノベーション研究』第3巻第1号 2008年)
- 7) 李裕群「駝山開鑿年代與造像題材考」(『文物』1998年第6期)
- 8) 雲門山石窟第1龕・第2龕の年代については以下のものによった。

常盤大定・関野貞『支那仏教史蹟』第4冊(仏教史蹟研究会 1926年)  
閻文儒「雲門山興駝山」(『文物参考資料』1957年第10期)
- 9) この部分の表記は主に村松氏によっている。
- 10) この点については,北斉時代如来像から指摘したことがある。

小澤正人「山東龍興寺窖蔵出土北斉時代如来立像の一考察」(『成城文芸』198号 2007

龍興寺窖藏出土南北朝時代造像の年代について

年)

11) この地域ごとの造像の多様性については、岡田健氏が指摘している。

岡田健「南北朝後期仏教美術の諸相」(曾布川寛・岡田健『世界美術大全集 東洋編2  
・三国・南北朝3』所収 小学館 2000年)

図版出典目録

第1図 注2(c) 参照

第2図 1・2:青州市博物館提供 3・4:注2(g) 参照

第3~5図 敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟』2(1981年 平凡社 東京)

第6図 注2(c) 参照

第7図 注2(c) 参照

第8図 1・2・4~6:注2(c) 参照 3:注2(e) 参照

第9図 注2(c) 参照

第10図 筆者撮影

第11図 1:常盤大定・関野貞『支那仏教史蹟』第4冊(仏教史蹟研究会 1926年)

2~7:筆者撮影

第12図 1:中国石窟彫塑全集編輯委員会編『中国石窟雕塑全集』6(2001年 重慶出版社  
重慶)

2・3 東京国立博物館 朝日新聞社編『中国国宝展図録』(2000年 朝日新聞社  
東京)

(本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「中国隋初期仏教美術様式、形式とい  
う新概念の成立」(研究代表者八木春生)による研究成果の一部である)